

岡田弥生教授退職記念号によせて

著者	難波 功士
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	134
ページ	5-6
発行年	2020-03-12
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028555

岡田弥生教授退職記念号によせて

社会学部長 難 波 功 士

岡田弥生先生は、1974年3月に神戸女学院大学文学部英文科を卒業の後、大阪女学院中学校高等学校英語専任教諭として職歴をスタートされました。その後多くの高校・大学で教鞭をとり、翻訳・通訳などのお仕事もされ、1988年3月には神戸女学院大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程を修了されています。そして、1990年4月に聖隷学園聖泉短期大学英語科専任講師として着任し、1996年4月からは関西学院大学社会学部助教授、2002年4月からは同教授を務めてられました。また、2004年11月には関西学院大学大学院文学研究科より博士（文学）の学位を取得されています。

関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科では2004年4月より教育に当たられ、2006年4月からは同博士課程前期課程指導教授、2011年4月からは同後期課程指導教授を務めてられました。また、2002年度と2012年度との二度にわたり、イギリス・ケンブリッジ大学ダーウィンカレッジ客員研究員として同地に於て研究生活を送ってもおられます。所属学会は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本キリスト教文学会などです。

岡田先生のご専門は、ウィリアム・フォークナー（1897-1962）とT. S. エリオット（1888-1965）という二人の文学者です。フォークナーについては、博士学位論文“William Faulkner’s Hidden God: Time is Christ in Reference to Jeremy Taylor”があり、それをもとに『ウィリアム・フォークナーのキリスト像：ジェレミー・テイラーの影響から読み解く』（関西学院大学出版会、2010年）を刊行されています。エリオットに関しては、『「眼」から「薔薇」へ：F・H・ブラッドリー哲学から読み解くT・S・エリオットの自意識の変容』（関西学院大学出版会、2018年）にその研究がまとめられています。これら主著の二冊は、門外漢である私にとっても、フォークナーとエリオットの作品を読み解くために、岡田先生がじつに多くの資料・文献を渉猟し、時にはカバラの世界にまでわけいり苦闘された様子がひしひしと伝わってきます。『ウィリアム・フォークナーのキリスト像』のあとがきには、「フォークナーと私の本格的なかかわりは、大学の卒業論文で『響きと怒り』をハイデガーの『存在と時間』から読み解いたのが端緒である」とあります。また先生の修士論文のタイトルは‘The Transformation of T. S. Elliot’s Self-consciousness’です。こうした点からも、じつに長きの期間にわたり、先生が地道にこれら二人の作家・詩人と対峙してきたことが見てとれるでしょう。

大学における職務としては、2005年4月からの2年間、関西学院大学言語教育研究センター副長のポストにあり、英語教育の充実に尽力されました。学部においては2011年4月からの1年間、社会学部学部主任（現、学生担当副学部長）に就かれるなど、学部学生のケアにも努めてられました。また岡田先生は敬虔なクリスチャンであり、留学などの期間を除いては、学校法人関西学院の宗教活動委員や社会学部キリスト教教育委員会委員などを務め続けてられました。

そして、英語担当教員として、さまざまに英語の入試問題の作成に関わってられました。私はかつて大学の入試部長の職を務めていましたが、その時部員の間では岡田先生の緻密な仕事ぶりが評判となっていたことを記憶しております。また社会学部の場合、語学担当の先生であっても、卒業論文作成に至る演習（ゼミ）のご担当をお願いしてきましたが、岡田先生は、あまり英米文学や英語に興味をもっていなかった学生に対しても、粘り強くご指導されてきました。何事にもいいねいに、真摯に向き合うのが、岡田先生の流儀だと私は感じてきました。

最後に私事で申し訳ありませんが、私は同じ1996年に関西学院大学社会学部に着任しました。そして、

「私の母の妹のパートナーの弟さんの息子さんのパートナー」である岡田先生の存在は、非常に安心できる存在でした。

これまでの先生のお働きに感謝を申し上げるとともに、今後とも岡田先生のなおいっそうのご活躍とご健勝を学部一同祈念しております。